親切のバトン

山口県　熊毛中学校　　３年　飯山　千滉

あのとき、

「席を譲ります」

このひとことが言えていたら、あの妊婦さんは楽になれていたのに。

ある日、私は母の用事で、待ち合わせのところまで一人でバスに乗りました。バスの中は人が多かったのですが、私はなんとか座ることができました。私が乗った次のバス停で、たくさんの人が乗ってきました。

そのとき、一人の妊婦さんの姿が私の目に映りました。私が座っている席の斜め前にその妊婦さんは立っていました。私は（誰かが席をゆずるだろう）とずっと思っていました。しかし、誰も席を譲りません。辺りを見渡すと、自分より若い人はいません。（私が譲らなければ）と思いました。でも、なかなか勇気が出ません。たったひとことも言えないのです。どうして言えないのだろう、とずっと心の中で考えていました。周囲の人からは、（なぜあの子は譲らないの）と思われていたでしょう。明らかに元気な中学生の自分が席を譲るべきです。(勇気があれば) と何度も思いました。

そうしているうちに次のバス停に着き、何人もの乗客が降り、バスの中はほとんど空席になりました。私の隣に妊婦さんも座ることができ、ほっと安堵した私を乗せて、バスは発車しました。

しばらくして、妊婦さんが私に話しかけてこられました。「どこかへ行くの？」とてもやさしい口調でした。私は母と待ち合わせてしていることを伝えました。「そうなんだ。私はこれから病院。赤ちゃんをみてもらうの」とお腹をさすりながら言われました。その表情は少し苦しそうに見えたけど、とてもうれしそうにも見えました。

その顔を見た私は、「すみませんでした。さっきは席を譲ることができなくて」と無意識のうちに言っていました。すると妊婦さんは、少し驚いた様子で、やさしく、「大丈夫だよ。ありがとう」と返してくださいました。私はその言葉に救われました。しかし、勇気を出すことができなかった自分のふがいなさを、とても恥ずかしく思いました。

妊婦さんは、私が降りる予定の一つ前のバス停で降りていかれました。降りる際に妊婦さんは私に、「今日はどうもありがとう。席を譲ろうと思ってくれただけでもうれしかったよ。その思いをもち続けて、いつかほかの人に親切にしてあげてね」と言葉をかけてくださいました。私は胸が熱くなりました。それは魔法の言葉でした。私が渡し損ねた親切のバトンを、あの妊婦さんはそっと拾って私に渡してくださったのです。今度は私がこのバトンを渡す番です。

ちょっとした出会いから、私は親切の種をもらいました。今度は私がその親切をほかの人に渡し、それが次の人につながっていけばいいなと思います。こうやって人と人がつながっていけば、みんな毎日笑顔で過ごせるようになるのかもしれません。

これから私は、困っている人がいたら勇気を出して声をかけ、今度こそ妊婦さんからもらった親切のバトンを次の人に渡します。